座談会

バルーチャ美知子先生
くまがいなおみ先生
鈴木慶子先生
井川恵美先生

ご自宅やさまざまなショップ、カルチャーセンター、地方への出張セミナーなど、いろいろな場面を通して教室展開をしていらっしゃる4名の先生にペイントをもっと楽しく！そしてペイントの輪を広げるためにどうすればよいのか…。生徒さんへの伝え方や自分自身のあり方を今までの経験にもとづいてお伺いしました。

――先生方それぞれは独自に活動をしていらっしゃいますが、今までの経験を通して生徒さんに楽しんでもらいながらトールを教えるために心掛けていることは何かありますか？

バルーチャ　生徒さんの前に出る前に、ニコッと笑う練習をしてから教室に臨みます。こわばった顔をしていては、生徒さんも緊張しますからね。こちらが笑えば相手も笑う、人間同士ですから気持ちの問題が大事ですね。私のセミナー（レッスン）は「オマケ付き」が特徴です。今日は来てよかったな、と誰もに思ってもらえることが教室の運営方針です。オマケは一人一人にペイントをプレゼントすることもありますし、物でなく、美術館情報であったり、私の視点で目に止まったことを伝える、例えば健康の話や食べ物の情報であったりすることもあります。でも、自由自由とは言っても、基本の技術はしっかり教えていますよ。（笑）

――井川先生のお教室ではどうですか。

井川　私のところは普通のトールペイント教室ですが、基本のストロークはとても大切だし、しっかりと教えたいので、例えばSTEPIのように、初級ではストロークのいっぱい入っているものを教えています。人と速度を合わせようとする人がいるのですが、人と比べる必要はないんです。人と比べることは悪いことではないけれど、人より上手いとか下手だとか思って今の自分がダメだと落ち込むことはないし…。またそういうことから開放してあげるように心掛けています。みんな楽しみに来ているですよね。先生になりたい人も早く技術を習得したくて遠くから来ている人も、楽しくなくては続きませんよね。教えるほうも自分のことを色々隠さずに全部話すことで、生徒さんとの壁を無くすことができると思うんです。私はちょっと早くトールを始めた先輩であって先生ではないと思っています。

くまがい　教室を開きたいと思う人は、基本的には人と接することが好きな人ですよね。教室で楽しさを無理に作るのではなく、楽しい時間を共有する場所が教室ですよね。そういう場所では教える側も癒されるんです。

――でもしゃべることが苦手な先生の場合などはどうしたらよいでしょうか。

バルーチャ　何かしら自分の得意分野で自分の経験したことを生徒さんに伝えていけばいいんです。最初から『先生』ではなく、みんなと同じ視点に立って接することは大事なことです。

鈴木　最初はうまくしゃべれないけれど、蓄積して雰囲気が出来上がっていくんですよね。私も10年教えてやっと気軽にお話しができるようになりました。（笑）

バルーチャ　人に教えるということは、子供を育てることと同じで、必ずほめてあげる、ということが大事です。新しく教室にくる人は、それだけで緊張することもあるのですから。新しい人が早く馴染めるように配慮してあげることも大事です。

――鈴木先生はどのようにお教室を始められたのですか。

鈴木　最初は企業が開催する大きな教室での指導から始めたので、大変なことも多かったですね。当時はトールペイントをやっている人は少なかったので、生徒さんは他分野での（パッチワークやデコパージュなどの）先生級の方々が多かったのです。人に教えることに慣れている方々に教えるのですから、新人先生の私はとても緊張しました。先生である私にキャリアが無いので、習うほうも色々言いやすかったんだと思います。人間関係でもつらい面もあって、お教室を楽しくしようという余裕は無かったと思います。カリキュラムもそんなにきちんとしていなくって、次々と追われる形で教室をしていました。今思うと自分自身、良くあのレベルで先生ができたなと（笑）。その後は自分でも努力をして前向きにやってきたんだという思いもあります。今は本当に良い形で教室を進められるようになりました。

バルーチャ　人にトールを教えようと思ったら講習料を決めなければなりません。トールペイントというのは最初コピーから始めるものですけれど日本人は学ぶ力が優れているからコピーは割と得意です。安い金額で教えれば金額なりの人しか集まりません。ただ自分が人にトールを教えたいというのでなく、本気で絵筆を持つ人を増やしたいという思いでお教室を開くのならプロとしてお金をもらうという意識をきちんと持ってそれなりの料金を頂いたほうが良いです。人間関係も含めてタフなハートが無いと持たない仕事かも知れませんね。でも経験を積んでいくうちにハートはタフになっていきますよ。

くまがい　私は教室を開く前、先生について6ヶ月習いました。先生のカリキュラムのままでなく、自由に変えることを快く許して下さる先生だったので月に2回のレッスンがすごく楽しみでした。自分が教室を持つようになってから、私の起こしたデザインを押入れにしまわれたくはないので、生徒さんは気に入らない作品を作らないようにしてほしいと思っています。気に入らない作品も、どうしたら気に入った楽しい作品に出来るか、ということを考えます。ストロークは絵を描く中で身に付けてもらうようにしています。お手本のままが良い人はそのままでも良いけれど、変えたい人は相談にのります、と言っています。みんなが色々楽しんでいるのを見ているうちに、お手本通りが良かった人も変えてみたくなるんです。20人が20色ですると20倍の勉強が出来るし、教える先生の側もすごく勉強になる。

――協会のカリキュラムでは「色を変えてもいいですか」という質問に「同じ色味でお願いします」と答えているのですが、それはよいことなのでしょうか。

くまがい　まずはこの通りに描いてみましょう！ということも大切ですよね。そして技術のついたところでもう一度アレンジに挑戦。たくさん描かないと上手にならないですし。1回で「はい終わり！」というのではなくてね。

バルーチャ　例えばカリキュラムのSTEPIも1枚は見本どおりの色でまず描く。それから自分のトールに幅を持たせるためにもう一度違う色で描いてみる。そうすることによって先生自身も力がつく、自分が豊かになるチャンスになるんです。それが次に幅を持った講師を育てることにつながる。色を変える勉強をすることで自分のキャパを広げる。

それが結局は選ばれる先生になるチャンスにもつながります。『笑ってニッコリほめながら』なんだけど『基本はきっちり教えよう！』それが先生たる所以です。

鈴木　先生が2つ違う色で描いてあるのを見たら生徒さんもとても参考になりますよね。

バルーチャ　自分自身、幅をもった豊かな先生になるチャンスですよ。

くまがい　それにはあのサンプラーはとてもいいですね。みんなが同じ物を描くのに個性が出せるのはやはり色です。一つのデザインでも自分がそれまでに習ってきた描き方で変えれば違うものが描けます。同じデザインが次に使える。そういうことで“選ばれる先生”になるんですね。知っていることはケチらず教えること、もったいつけて出し惜しみをしていてはダメ。新しいテクニックを教える時はみんなを集めて説明する。私の教室ではそうしています。

――ほかにも先生としての心がまえはありますか？

鈴木　今は後から上手な人がドンドン出てきますよね。自分がいつまで先生でいられるかしらという不安もありますが、逆にずっと先生でいるための努力もしていますね。

バルーチャ　技術に自信があれば教えることのプロとして長く続けていけます。スタンスを変えないで教える強さを持ってほしいですね。

くまがい　初心を忘れると、先生になった人は他の人を見下すことになってしまう。そういうことは避けてほしいですね。

井川　鈴木　そうそう。トールが上手で先生であることは偉いことではないですよね。自分の教えた人が活躍するようになることは、本来喜ぶべきことだと思います。

くまがい　先生は生徒の上に立って上から押さえつける存在ではなく、生徒の踏み台になって人を育ててあげるものだと思います。生徒は卒業するものなのです。

鈴木　今は私のお教室では古い生徒さんも新しい生徒さんも同じ作品を仕上げています。

バルーチャ　同じ作品で個性を出すには良い方法ですね。

鈴木　先生と生徒さんという縦の風だけでなく、先生同志、生徒同士の横の風が流れると良いですね。

井川　先生によっては生徒を自分の所有物のように思っている人もいますね。他の先生のセミナーや作品展でさえ行ってはいけないと言われるそうです。

くまがい　もっと広い気持ちで見てあげてほしいですね。他を知ることで幅があり、広がりのある豊かな先生になるためにも。もっとオープンに。

バルーチャ　先生は先生を育てるのです。同じことをやれて良かったね、と言ってあげる。その他の部分においては勉強をしながら講師として自分を高めていってほしいと思います。

井川　先生は今日その生徒さんが何をしたかったのか、何に困っているのかをわかってあげる努力をしてください。それが積み重なっていくことによって、楽しい教室になっていくと思うし、自分自身も豊かになれます。

バルーチャ　その日の全てを学ばなくても何か一つ、参加して良かったと思える部分があればよいと思います。プラスαのほんの小さなことでも良いです。

井川　色一つとっても、自由にして良いわよ、と言う先生と、自由にされたらどうしようと思う先生とでは、生徒が感じるものも違うと思います。

鈴木　自分が学ぶ姿勢と好きと言う気持ちが大切ですよね。その思いが生徒がついて来てくれるクラスを作るのだと思います。技術だけではなく、まだまだ学ぶことは沢山あります。その姿勢が大事です。生徒さんがどんどん成長することによって、講師が一生懸命になることはとても大事なことです。

――先生が一生懸命学ぶことで、生徒さんにもいい刺激になりますね。

くまがい　先生が一生懸命やっているかどうかを生徒はすぐ見抜きますよ。そういった意味では生徒さんの方がシビアに見ていますよね。主婦から『半分プロ』になるのではなく、お金をもらって教えるのであればプロに徹しなければいけないと思います。

鈴木　そうそう。自分がもし習うのであったら、そういった先生に習いたいですものね。

バルーチャ　生徒がお休みすることはあっても、私は教室を休んだことはありません。

3人　たとえ風邪を引いて体調が悪くても、教室では元気でいるのよね。家に帰るともうグタっとなるのだけど…。

バルーチャ　私は教室はエンターテイメントだと思ってやっています。楽しく教えることが大事。その時間は、楽しまなくっちゃ！ってね。

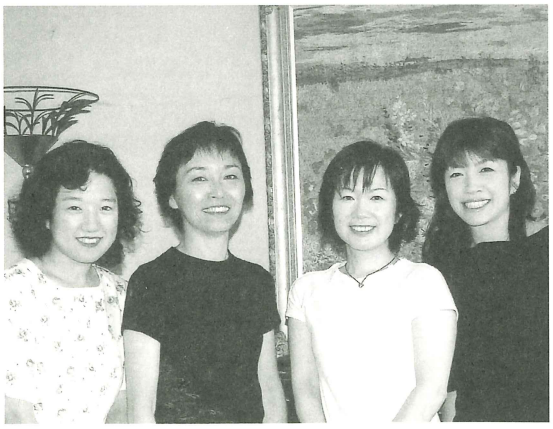
くまがい　本当！先生が楽しんでいると、生徒も楽しいですよね。

鈴木　私の生徒さんたちも、様々な事情を抱えているけれど、教室の時間は楽しくすごしていますね。

バルーチャ　自分のスタンスをきちんと持ち、人として優しくなって接する。自分が自分のカラに閉じこもって教えると、習う側にもそれが伝わりますからね。

くまがい　生徒さんにとっては最初に出会った先生からの情報が全てになるから、その影響力を自覚することがとても大事です。そしてそのことをいつも忘れずにいてほしいですね。生徒が先生を選ぶ時代ですから、先生として選ばれる先生にならなくては。

バルーチャ　相手があってのものですからね。呼ぼうとして呼べるものではなく、自然と集まってくるものです。優しくされた経験が無いと相手に優しく接することができないものです。優しさを提案する、見えない部分への取り組み方をもう一度考えてみましょう。

――自分自身色々な経験をして、トールポイントだけではなく人間として魅力のある人になるということがとても大切だということですね。そして“選ばれる先生になる”よう努力をし続けることが必要なのだということをとても感じました。今日は本当にどうもありがとうございました。

（敬称略）